

安土城
築城 450 年

安土・近江八幡 信長から秀次へ引き継がれた夢

京と東国・北陸を結ぶ交通の要衝であり、国内最大の琵琶湖には荷を満載した船が日々行き交った近江国（滋賀県）。「近江を制する者は天下を制す」と言われたこの地で、織田信長は理想の城下町を描いた。安土城下の繁栄は遠くヨーロッパにも知られ、信長が倒れた後は豊臣秀吉の甥・秀次にその志が引き継がれる。そして、彼らが整えた自由な商圏はやがて江戸へ雄飛する「近江商人」を育んでゆく。安土城築城から四五〇年目の近江八幡の旅、まずは信長・秀次へと繋がるバトンを見ていこう。

参考文献：松田毅一、川崎桃太訳『完訳フロイス日本史 織田信長篇』（中央公論新社）

世界へと開かれた安土

城の在り方を変えた歴史の転換点・安土城

天正三年（一五七五）、長篠の戦いで武田氏を下した織田信長は、その翌年から自らの理想の城下町の建設に着手する。三年後、琵琶湖を望む安土山の山頂に建てられたのは、城の構造すべてに石垣を取り入れた堅城。七層の天主は名だたる職人が手掛けた壮麗な装飾が内外を彩り、信長はこの天主で日々の生活を送った。外壁を金箔で覆った上層部が陽光に煌めく様は、天下統一へと突き進んでゆく信長の権力の象徴として映ったことだろう。

　従来の土造りの山城から、石垣を基礎とする城へ。そして、戦のための軍事拠点から政治文化の中心へ。信長が築いた安土城は近世城郭の先駆けといわれている。



明治 29 年（1896）、嵜碕品山（いわさきほんざん）が描いた「安土城図」。安土城を描いた数少ない絵だ

アフリカ人も闊歩した幻の国際城下町

　市中を走る街道と目の前に広がる琵琶湖の舟運、多くの人や物が行き交う安土の地で、天正五年、信長は「楽市楽座の掟書」を発布する。商人や職人を呼び込み、売上に対する関税をかけないことで活発な商業圏の確立を促す楽市楽座だが、実は信長以前よりすでに行われており、安土でも佐々木六角氏（一五六八年に信長に敗北）によって実施されていた。信長はこうした先人の優れた知恵や取り組みを積極的に活用しながら、より大きな規模で実施し、城下に賑わいを創り出していった。琵琶湖に浮かぶ沖島の漁師に船の行き来を見張らせる代わりに漁業権を認めたことも、民から一方的に搾取するのではなく、双方に利のある政策を執る信長の姿勢を示しているだろう。

　そんな安土城下の賑わいを伝える証言が、当時信長に謁見したイエズス会宣教師、ルイス・フロイスの『日本史』にある。フロイスは安土の町について「当時、全日本でもっとも気品があり、（中略）美観、建物の財産と住民の気高さにおいて、断然、他のあらゆる市（まち）を凌駕していた」と記している。

　宣教師はカステラや金平糖、マントをはじめとする洋服を献上。信長がキリスト教の宣教師たちを比較的寛容に受け入れたのには、未知の文化への好奇心もあったのだろう。こうした海外との交流から安土の町に誕生したのが、キリシタン神学校（セミナリヨ）だ。ここでは少年たちがキリスト教の教理や西洋の学問・文化を学んでおり、当時の日本国内では極めて珍しい存在だった。また、宣教師を取りまとめる責任者である巡察師ヴァリニャーノが伴った黒人の従者に興味を持った信長は、屈強な肉体を持つ彼を「弥助」と名付けて家臣にすることに。この弥助は現在のアフリカ・モザンビークの出身ともいわれ、のちに信長やその嫡男・信忠と共に本能寺の変でも奮戦している。

　国内外の多くの人々が行き交った安土城下だったが、天正十年（一五八二）、本能寺の変で信長が倒れると、城は取り壊され、城下の賑わいも失われることに。築城開始からわずか六年後の出来事だった。だが、信長が創り出したまちの賑わいや文化は、その後豊臣秀次によって引き継がれていくこととなる。





左上／安土城の正門・黒金門跡。ここより内部は激しい火災に晒され、石垣にも高温で熱された跡が残る　右上／安土城破却後、秀吉が二の丸に築いた信長の霊廟　左下／山頂の天主跡。巨大な礎石が等間隔で敷き詰められ、七層に及ぶ天主の巨大さを物語る





上／名だたる職人が手掛けた原寸大の安土城５層・６層部分。金箔４kg、10 万枚が使用されている（P49「安土城天主 信長の館」にて）
右／大手門から真っすぐ延びる大手通。左右には豊臣秀吉や前田利家らの屋敷があったと伝わる　左／上空から見た安土山。その向こうには「西の湖」、そして秀次が城を築いた八幡山が見える

近江商人へと結実した、秀次のまちづくり

安土の賑わいを取り込み より大きな商業都市へ

天正十三年（一五八五）、この地を領地とした豊臣秀次は、安土山から西へ四kmほど離れた八幡山に城を築き、その麓に近江八幡の城下町を整備する。安土からも商人や職人が続々と移り住み、楽市楽座の政策も踏襲され、闊達な商業が推奨された。

秀次の功績として特に大きいのは、現在にも残る八幡堀を掘削・整備した事だろう。琵琶湖と城下を結び、船が町まで入れるようにすることで、より人と物が盛んに行き交うように。

天下人・秀吉の甥であり後継者とも目された秀次は、天正十九年（一五九一）、小田原攻めの褒賞で百万石の大大名に。そして同年、八幡山城から尾張国・清洲城へと居城を移した。文禄四年（一五九五）、秀次事件（※）をきっかけに秀次が切腹させられると、八幡山城の廃城が決定する。築城からわずか十年のことだった。だが、城の破却後も信長・秀次が整えた商業都市としての基盤は揺るがず、近江八幡では時代の機を捉えた商人が育っていくこととなる。


八幡山のふもと、八幡公園（近江八幡市宮内町）には、まちの礎を築いた秀次の像が建つ



上／時代劇やNHK連続テレビ小説などでもロケ地に選ばれている八幡堀　下／碁盤の目状に整えられた近江八幡の町並み。「歴史的建造物保存地区」として往時の面影を伝えている

「三方よし」を携えて 江戸へ雄飛した近江商人

時代は下り、江戸時代。近江八幡を本拠とする商人たちは、全国各地へと商いの舞台を広げていった。いち早く江戸に進出した商人たちは、蚊帳や畳の商いで繁盛し、日本橋に店を構えた。その後も薬や漆器、呉服などの商人が江戸近郊に進出。彼らは「近江商人」と呼ばれ、江戸で一目置かれる存在となっていった。

近江商人が掲げる商売倫理で最も有名なのが「三方よし」だろう。「売り手よし、買い手よし、世間よし」。現代にも通じるこの姿勢は、城主の失脚、城の破却という憂き目に遭う中で、近江八幡の商人たちが永く商いを続けるために絞り出した智慧の結晶ではないだろうか。

※文禄４年（1595）、秀吉より謀反の疑いを掛けられた秀次が出家させられたのち、切腹を命じられた事件。理由は諸説伝わり、その真相は未だ謎となっている

近江八幡を歩こう

まちの歴史を追った後は、市中に数多く残る史跡や見学スポットを４つのテーマで辿っていこう。安土町観光ボランティアガイド協会の向井義治さんに同行いただいた。


安土周辺のボランティアガイドを20年以上務める向井義治さん。相撲好きの信長に因み、安土駅ロータリーに設置された力士像は向井さんがデザインしたものだ

信長が引き継いだ六角氏の功績

沙沙貴神社


佐々木六角氏が祀られる沙沙貴神社（近江八幡市安土町常楽寺１）は全国の佐々木姓の始まりとされる

永禄十一年（一五六八）、観音寺城の戦いで信長に敗れるまで、約四百年にわたり一帯を治めてきた六角氏（佐々木六角氏）。宇多源氏佐々木氏の嫡流にあたる鎌倉時代からの名門で、観音寺城（全国百名城）の建つ繖（きぬがさ）山の麓で、いち早く「石寺楽市」を開いた。「六角氏は琵琶湖の舟運を活かす常楽寺港を整備し、十六世紀前半にはすでに整備していたようです。こうした六角氏が築いた土台が、安土城下の繁栄の背景にありました」と向井さん。

幻の安土城を体感

安土城郭資料館── 安土城天主 信長の館 ── 滋賀県立安土城考古博物館


安土城郭資料館（近江八幡市安土町小中700）の模型。20分の１の大きさとはいえ、その大きさに驚くだろう


上／滋賀県立安土城考古博物館（近江八幡市安土町下豊浦6678）のシアターにて。琵琶湖を望む安土城の様子がよく分かる　下／1992年、スペイン・セビリヤ万博にて、日本のメイン館展示として造られた原寸大の安土城五層・六層部分。こちらは金と漆、螺鈿の見事な装飾が施された六層部分。現在は安土城天主 信長の館（近江八幡市安土町桑実寺800）で展示


安土城天主復元　内藤昌 ©

次に向かったのは、安土城を訪れる前に訪ねたい施設。安土駅東口の前に建つ「安土城郭資料館」では、二〇分の一スケールで再現された安土城の模型を見ることができる（※）。地下一層から三層までが吹き抜けになり、空中に張り出す形で能舞台が設置された二層、渡り廊下が渡された三層、八角形をした五層など、安土城の造りを間近に見ることが可能だ。

続いて訪れたいのが、P46でも登場した「安土城天主信長の館」。ここでは原寸大で再現された安土城の五層・六層部分を間近で見られ、その煌びやかさと迫力に驚くだろう。館内のスクリーンでは安土城にまつわる動画も公開されている。

そして、「滋賀県立安土城考古博物館」にも訪れておきたい。二〇二五年にリニューアルされた常設展「安土城と信長 戦国の世界」では、八角形のシアターにて高精細フルCGで再現した映像を上映。往時の姿を目に焼き付けて、安土城を登れば、そのスケールをより実感できるはずだ。

安土城天主復元　内藤昌 ©

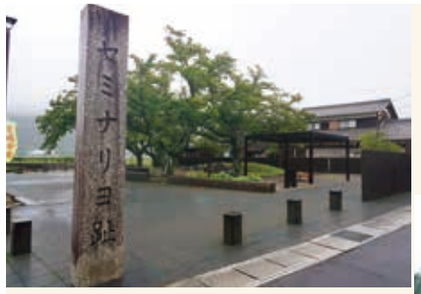
※安土城の造りは諸説あり、内藤昌氏の説を採用した模型となっている

相撲好きで知られた信長だが、そこには腕力に優れた家臣を見つけて取り立てるという目的もあったという。

「信長が開いた竹相撲が、現在でも大相撲で用いられる『東』と『西』の由来だといわれているんですよ」

「竹相撲」とは力自慢の力士が巨大な竹の両端をそれぞれつかみ、引き合うなどして腕力を競い合ったという競技。ある日、互いに力が拮抗して決着がつかなかったことから、信長の采配で引き分けに。そして両者に「東」「西」の姓が与えられた。

また、かつてセミナリヨが建っていたと伝わる跡地には、学校でのタイムスケジュールを記した説明板を見ることができる。四時半に起床し、五時に「ミサ聖祭と掃除」、六時から勉強とラテン語の学習と続き、十九時にラテン語や日本字・ローマ字の学習、二〇時に一日の反省、夕の祈り、就寝となる。「約四五〇年も昔に、いち早く世界の知識が飛び交い、それを子どもたちが学ぶことができた。安土城下は世界に開かれた特別な町であったといえるでしょう」







左／宣教師が行き来した往時を浮かべながら歩きたいセミナリヨ史跡公園（近江八幡市安土町下豊浦）　右／竹相撲の様子を描いた絵馬が飾られる新宮大社（近江八幡市安土町下豊浦 3321）

信長が遺した文化に触れる

新宮大社――セミナリヨ史跡公園







上／水の郷として名高い近江八幡。所要時間30分の八幡堀めぐりでは、風光明媚な風景をゆったりと楽しめる　左下／近江商人も篤く敬った日牟禮（ひむれ）八幡宮（近江八幡市宮内町257）　右下／西村太郎衛門邸跡に建つ近江八幡市立資料館（近江八幡市新町2-22）では、近江商人に関する資料を展示

近江商人の隆盛を伝える

八幡堀めぐり――近江商人屋敷

琵琶湖と町を結ぶ八幡堀が豊臣秀次によって整備されたことで、商業都市として一層の隆盛を見せた近江八幡。現在では、八幡堀を和船で巡る「八幡堀めぐり」を楽しむことができる。揺れる柳と白壁の土蔵が水郷の情緒を一層引き立ててくれる。

続いて訪れたのが、近江商人の屋敷が建ち並ぶ一角。寝具の「西川」の創業者・西川甚五郎、二〇歳で長崎から安南（ベトナム）へと渡った貿易商・西村太郎右衛門をはじめ、この町から進取の精神に富んだ経営者が数多く羽ばたいていった。









上／五穀豊穣を祈る信長ゆかりの左義長まつり。その年の干支に因んだダシ（山車）を小豆や昆布、するめ、鰹節などの食材で作り、13基のダシが町内を巡行。ダシに火を付けた火祭りがハイライトを飾る。右は2026年の信長まつりで里帰りする左義長　左下・右下／八幡まつりの様子。琵琶湖の湖岸に生育するヨシと菜種がらで作った大松明に火を付ける。松明には高さ10m以上のものもあり、火の粉を浴びながら竹で松明を突きおこす勇壮さと、夜空を焦がす松明の迫力に圧倒される

まちの絆は現代に

信長ゆかりの安土と、秀次が築いた近江八幡。二人が繋いだまちづくりの思いは今もなお二つのまちを結びつけるかすがいとなっている。その象徴でもある祭りに光を当ててみよう。

地域を繋ぐ三つの祭り 十一月には信長まつりを開催

近江八幡の日牟禮（ひむれ）八幡宮で催される「左義長（さぎちょう）まつり」（三月）、「八幡まつり」（四月）、そして毎年十一月に安土で開かれる「信長まつり」。安土城築城四五〇年を迎える今年、祭りでも両地域の交流が図られている。

「近江八幡の春の風物詩である左義長まつりはもともと安土城下で行われており、信長も華美な衣装を身にまとって、町衆と一緒に踊ったと伝わります。今年は、秋に安土で行われる信長まつりの武者行列が左義長まつりに参加。そして十一月の信長まつりは、左義長が『里帰り』する予定です。これをきっかけに両地域の交流がさらに進み、この先五〇〇年、六〇〇年に繋がる一歩にできたら」と近江八幡観光物産協会の事務局長・田中宏樹さんは語る。

安土城築城450年 第42回 あづち信長まつり

11月14日（土）・15日（日）

会場 **安土文芸の郷**　時間 **両日共10:00～16:00**

安土城築城450年を記念し、1年間様々なイベントや企画が行われてきた近江八幡市。そのハイライトともいえるのが2日間にわたって行われる「あづち信長まつり」だ。毎年多くの見物客が訪れる武者行列に、今年は近江八幡の左義長ダシも加わり安土山の麓を巡る（15日10時～）。ステージイベントほか様々なイベントも開催。

―― 安土・近江八幡への旅へ ――

近江八幡駅は東海道新幹線・米原駅から約20分、安土駅は近江八幡駅より1駅3分。時間にゆとりがあれば、彦根や長浜（米原駅より9分）にも足を延ばし、戦国に思いを馳せてみるのもおすすめだ。

ACCESS　JR東海道本線



近江八幡市公式観光サイトでは、特集で紹介した各スポットの詳細やマップの他、「安土城ディスカバリー」「八幡堀を愉しみ尽くす」など、様々なモデルルートを紹介している。